

【特集】現象学とエスノメソドロジーの現在

高 艸 賢

本特集は、現象学とエスノメソドロジーの関係性をこんにちの視座から考え直すことを目的としている。エトムント・フッサールをはじめとする現象学的哲学が社会学に与えた影響として最もよく知られているのは、アルフレッド・シュッツのいわゆる「現象学的社会学」である。しかし社会学と現象学の交わりを語る際に「現象学的社会学」と同じくらい重要なものが、エスノメソドロジーである。エスノメソドロジーの創始者であるハロルド・ガーフィンケルは、タルコット・パーソンズの下で博士論文を書いた人物であるとともに、フッサールやシュッツ（そしてアロン・グールヴィッチ）といった現象学者に大きな影響を受けた人物でもある。ガーフィンケルの『エスノメソドロジー研究』の序文では、パーソンズ、シュッツ、グールヴィッチ、フッサールの4名から影響を受けたことが明示的に述べられている（Garfinkel [1967] 1984: ix）。

シュッツの「自然的態度の構成的現象学」に影響を受けたガーフィンケルは、日常の諸活動を秩序立ったものとして行う際の方法を探究する学問を、「人びとの方法論」すなわちエスノメソドロジーと呼び、日常生活が「見られているが気づかれていない」方法論によっていかに秩序立ったものとして組織化されているかを明らかにした。ガーフィンケルの有名な「違背実験 (breaching experiment)」は、そうした自明視された秩序をあえて破壊するような振る舞いをする事で、日常生活の秩序が規範的期待に沿って組織化されていることを示したものだ（Garfinkel 1964=1989）¹。

しかしながら、「先駆者シュッツから創始者ガーフィンケルへ」という影響関係が明確に認識されてきた一方で、その後のエスノメソドロジー研究においてはそれにとどまらない観点が提示されてきた。いくつか紹介しよう。「ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジー」の立場に立つ西阪仰は、「探究の原初的な場を個人の意識にもとめ、しかも、その意識は基本的に他人に対して閉ざされ他人には接近不可能なものだと想定している」（西阪 2001: 220）とされるシュッツの立場に「不満」を表明し、公的に観察可能な実践を見ることを提案している。マイケル・リンチは古い「プロトエスノメソドロジー」と新しい「ポスト分析的エスノメソドロジー」を区別し、シュッツを克服されるべき「プロトエスノメソドロジー」の側に位置づけている（Lynch 1993=2012: 139-186）。また水川喜文のように、エスノメソドロジーの方向性を現象学というよりネオプラグマティズムとの関係で捉えようとする試みもある（水川 1996）。

これらの議論で想定されている「現象学」の内実はさまざまだろうし、必ずしもすべての

¹ エスノメソドロジーの概説としては、前田・水川・岡田編（2007）を参照されたい。また「少なくともガーフィンケルによる試みは、現象学になじめば、よく理解できるようになると思われます」（Psathas 1988=1989）と述べるジョージ・サーサスの立場は、エスノメソドロジーの端緒として現象学を重視する立場と捉えることができる。

論者が現象学に批判的というわけではない。ただ、留意すべきこととして、ハーヴェイ・サックスの創始した会話分析がエスノメソドロジー研究の中心になったことと、エスノメソドロジーにおいて現象学よりもルートウィヒ・ウィトゲンシュタインやピーター・ウィンチの影響が強くなったことを指摘しておきたい。例えば「概念の論理文法」の分析は、「〈理解〉〈意図〉〈想起〉といった心にかかわる概念を、認知科学や心の理論に代表されるような認知主義的な考え方、すなわち、個人の内部にある（と想定される）心の働きによるものとしてとらえるのではなく、実践のなかでの達成としてとらえなおす」（秋谷・平本 2019: 48）ものである。少なくとも現象学を意識の構造や意識の働きについての学として捉えるかぎり、言葉を用いたやりとりにフォーカスするエスノメソドロジー・会話分析とは相性が悪いように見えてしまう。

総じて言えば、会話分析の登場以降のエスノメソドロジーは、現象学と深く結びつくことのない形で展開してきてきたように思われる。2019年に日本社会学会の機関紙『社会学評論』に掲載された「分野別研究動向（エスノメソドロジー）」では、エスノメソドロジーにおける「現象学的色彩の後退」（秋谷・平本 2019: 44）が指摘されている。

しかし近年、現象学とエスノメソドロジーの関係性に対する関心が高まりつつある。例えば保健医療系の研究では、エスノメソドロジストと現象学者の協働による研究成果が出されている（前田・西村 2018, 2020）。エスノメソドロジーを「三人称の現象学」として扱うウェス・シャロックらの視座も、再び注目されるようになってきている（e.g. 岡田 2019）。これらの動向については、本特集における前田論文や池谷論文でも触れられる。また、ダン・ザハヴィが現象学の入門書でエスノメソドロジーに触れるなど（Zahavi 2007=2015）、現象学的哲学の側でもエスノメソドロジーに関心を寄せる人が増えてきているように思われる。マイケル・バーバーのように、志向性の構造を解明する現象学がエスノメソドロジーと結びうる関係を批判的に検討している哲学者もいる（Barber 2012）²。現象学者とエスノメソドロジストとの協働可能性、両者が相互に学び合える点、問題関心の異同等をこんにちの視座から考え直すことが求められていると言えよう。

また、大風呂敷を広げるようだが、エスノメソドロジーと現象学の関係性を考えることを通じて「現象学とは何か」「現象学が現象学であること条件とは何か」といった論点への示唆も得られるのではないかと筆者は考えている。「事象そのものへ」という現象学の標語を、「姿を見せるものを、それ自身から姿を見せるままに、それ自身から見えるようにする」

² このほか、「現象学とエスノメソドロジー」に関連する研究会等が開催されている。管見の限りでも、以下のようなものがある。

瀬戸内哲学研究会連続セミナー「現象学的方法の諸相 第1回 現象学とエスノメソドロジー」（2018年5月26日）<https://www.let.okayama-u.ac.jp/news/2018/05/1699/>

第17回フッサール研究会「「社会」の現象学の可能性」（2019年3月16日）<https://sites.google.com/site/husserlstudiesjpn/meeting/17th/abstract?authuser=0>

第45回日本保健医療社会学会大会「RTD8 医学的なのが埋め込まれた日常生活——現象学・エスノメソドロジーがもたらす保健医療社会学の視座」（2019年5月19日）<https://square.umin.ac.jp/medsocio/conf2019/program.html>

（ウェブサイトの最終閲覧日はいずれも2021年7月8日）

(Heidegger [1927] 1967=2013: 49) こととして解するならば、エスノメソドロロジーはまさに「事象そのもの」へ向かっている学である。このことは本特集の三つの論文を読んでいただければよくわかるだろう。しかし同時に、エスノメソドロロジーは現象学においてしばしば強調される「一人称視点からの出発」から明確に距離をとっている。一人称視点から出発することなしに「事象そのもの」へと向かうエスノメソドロロジーは、現象学者にとって「現象学」なるもののアイデンティティを問い直す契機となるのではなかろうか。

以上のような問題意識に基づいて、2020年12月5日に日本現象学・社会科学会第37回大会シンポジウム「現象学とエスノメソドロロジーの現在」がオンラインで開催された。提題者としてエスノメソドロロジーの専門家である前田泰樹氏、池谷のぞみ氏、浦野茂氏をお招きし、ご報告いただいた。また、現象学的哲学の専門家である家高洋氏にコメンテーターをお願いし、議論を盛り上げていただいた。本特集はこのシンポジウムでの報告・コメントに基づいている。シンポジウムへの登壇と原稿執筆をご快諾いただいた各氏に改めて感謝申し上げます。

文献

- 秋谷直矩・平本毅、2019、「分野別研究動向(エスノメソドロロジー):エスノメソドロロジー・会話分析研究の広がり」『社会学評論』70(1): 43-57.
- Barber, Michael, 2012, "Why Ethnomethodology Needs the Transcendental Ego," in Hisashi Nasu and Frances Chaput Waksler eds., *Interaction and Everyday Life: Phenomenological and Ethnomethodological Essays in Honor of George Psathas*, Lexington Books, 73-87.
- Garfinkel, Harold, 1964, "Studies of the Routine Grounds of Everyday Activities," in *Social Problems*, 11(3): 225-50.
(北澤裕・西阪仰訳、1989、「日常活動の基盤: 当り前を見る」『日常性の解剖学: 知と会話』マルジュ社、31-92.)
- Garfinkel, Harold, [1967] 1984, "Preface," in *Studies in Ethnomethodology*, Polity Press, vii-xi.
- Heidegger, Martin, [1927] 1967, *Sein und Zeit*, Tübingen: Niemeyer. (高田珠樹訳、2013、『存在と時間』作品社.)
- Lynch, M., 1993, *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*, Cambridge: Cambridge University Press. (水川喜文・中村和生監訳、2012、『エスノメソドロロジーと科学実践の社会学』勁草書房.)
- 前田泰樹・西村ユミ、2018、『遺伝学の知識と病いの語り: 遺伝性疾患をこえて生きる』ナカニシヤ出版.
- 前田泰樹・西村ユミ、2020、『急性期病院のエスノグラフィー: 協働実践としての看護』新曜社.
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編、2007、『エスノメソドロロジー: 人びとの実践から学ぶ』新曜社.
- 水川喜文、1996、「プラグマティズムと現象学の末裔: エスノメソドロロジー的思考の源泉に関する試論」『年報社会学論集』9: 187-98.
- 西阪仰、2001、『心と行為: エスノメソドロロジーの視点』岩波書店.
- 岡田光弘、2019、『社会学1・0』『社会学2・0』vs.『社会学0・0』『社会学1・5』: ウィンチェンシュタイ

ン派の『観察社会学』という視点から』『新社会学研究』4: 69-81.

Psathas, G., 1988, "Ethnomethodology as a New Development in the Social Sciences," Paper presented at Waseda University. (北澤裕・西阪仰訳、1989、「エスノメソドロジー：社会科学における新たな展開」『日常性の解剖学』マルジュ社、5-30.)

Zahavi, Dan, 2007, *Phänomenologie für Einsteiger*, Wilhelm Fink. (中村拓也訳、2015、『初学者のための現象学』晃洋書房.)

(たかくさけん・日本学術振興会特別研究員 PD)